

シマフクロウと千歳

長谷川 充

北海道シマフクロウの会顧問・前苫小牧市博物館長

はじめに

以前から筆者はフクロウ類に興味を持っていたが、シマフクロウに関心を抱くようになったのは、当地の北海道大学苫小牧演習林（現研究林）に一只のシマフクロウが移送されてからである。

平成四年十月、根室からやってきたこのオスのシマフクロウは、北大演習林に定着させようと環境庁の取り組みとして人為的に運ばれてきた個体であったが、尾羽に装着した発信機の不具合もあり、放鳥後の行方を確認することができなかった。シマフクロウとしては初めての試みであった分散定着化計画は失敗に終わってしまった。

この個体の探索と併せて行ったのが、苫小牧をはじめ千歳や白老など近隣地域のシマフクロウの生息調査であった。その後、調査の範囲を日高地方や十勝地方にまで広げて行い、情報の寄せられた地域を訪問しては関係者から詳しい話を聴いた。

シマフクロウと関わっているうちに、この鳥の文化誌や民俗誌にも興味を持ち、アイヌの人々がシマフクロウを村の守り神（コタンコロカムイ）と尊び、崇敬することや祭儀としてフクロウ送りすることなど、アイヌの人々との鳥との関わりを調べるようになった。

また、江戸時代以降の禽類図譜にシマフクロウの図のあることを知り、図を描くためにどのような方法で江戸に運ばれて行き、どのような禽類図譜に描かれているのか、そんなことなども調べてもいる。

こうした二連の調査で得られた知見に千歳とゆかりのある事柄も含まれているので、それらのことをここで紹介したい（文中敬称を略）。

シマフクロウとは

さて、シマフクロウといっても一般にはあまり知られていない鳥なので、本題にはいる前にまずシマフクロウについて説明したい。

世界にはおおよそ二科二五属、一七〇種ほどのフクロウがいるといわれているが、我が国には意外と少なく一二種のフクロウ類が記録されているに過ぎず、このうち日本で繁殖しているフクロウはわずか九種である。

なかでもシマフクロウは北海道にしか生息しない大型のフクロウで、フクロウ科のなかでは世界最大級の種である。全長は約七〇センチあり、翼開長は一七〇

センチから一八〇センチにも及ぶ。

北海道のほかにはロシアの日本海沿岸地域やサハリン南部、国後島や択捉島など比較的寒冷な亜寒帯性気候の地域に分布し生息している。

フクロウ類の多くは小型の哺乳類や昆虫類を食べる肉食性であるが、シマフクロウは魚を好んで食べる魚食性のため、生息する周辺には魚が遡上して産卵する河川と冬期間凍結しない湧



写真1 シマフクロウ
標茶町虹別（平成21年4月7日撮影：筆者）

水池があること、また営巣が可能な樹洞のある大径木が必要である。

支笏湖周辺では大正時代からパルプ用材の伐採がはじまっていたが、道内の森林開発が本格化したのは昭和三〇年代になってからで、建設業やパルプ業界の需要が増加し、大規模な森林伐採が行われるようになった。

そのため、シマフクロウが安全かつ安心して生活できる生息環境が悪化し、加えて生息域における河川の改修や水質の汚染、河口部でのサケ類の遡上阻害、釣り人口の増加など、彼らの主食となる魚類の減少が顕著となり、シマフクロウの個体数は急速に減少していった。

シマフクロウの危機的な状況を回避するため、昭和四十六年に文化庁はこの鳥を天然記念物に指定し、環境庁は平成四年に「絶滅のおそれのある野生動物種の保存に関する法律（種の保存法）」に基づいて「国内希少野生動物種」に指定している。

また、環境省の第四次レッドリスト（H24）では、ヤンバルクイナやノグチゲラとともに、「ごく近い将来における野生での絶滅の危険性がきわめて高い種」である「絶滅危惧ⅠA類（CR）」にランクされている。



写真2 強化プラスチック製の巣箱
(平成5年1月25日撮影)

同省が
この鳥の
保護増殖
事業に取
り組みは
じめたの
は今から
約三〇年
前の昭和
五十九年

からである。

シマフクロウが営巣できる樹洞のある大径木が少なくなっているため、生息地の周辺に人工の巣箱を設置するとともに、彼らの生命を維持するために必要な給餌活動に取り組んだ。翌年からは彼らの個体識別や生息域での動態を把握するために必要な標識である足環の装着を行うようになった。

これらの事業は現在もシマフクロウの保護増殖事業の中核事業となっており、平成二十六年七月現在で四五〇羽の個体に足環を装着し、設置した巣箱は一六九個でそのうちの五五個が使用され繁殖が確認されている。

足環の装着によって彼らの個体の識別が容易となり、さまざまなことが判明してきたが、なかでも心配なのは個体間での近親交配という問題で、近親間で結ばれたつがいが増加の傾向をみせ始めている。

現在のシマフクロウの生息数は一四〇羽前後で、つがいは五〇組前後といわれ、その三分の一は知床半島に生息し、残りは根室や十勝、釧路、日高などの限られた地域にしか生息していない。

千歳の鳥類相

現在、千歳の周辺でシマフクロウの姿を見たり、その啼き声を聞いたりするのはきわめて難しい状況にあるが、末尾の「千歳周辺でのシマフクロウ情報年表」にあるとおり、昭和三〇年代の末頃までは千歳川上流域に生息していた可能性があり、それ以前には支笏湖周辺にも生息していた。

千歳の地勢は勇払低地帯と石狩低地帯の深奥部の届き合った地帯であるほか、支笏湖火山系噴出物の堆積地特有の植相がみられ、湖沼や多くの清流域に加えて、太平洋沿岸の海洋性気象の影響を受け、複雑多岐な自然環境にある。

市内を西から東へと流れる清流千歳川の最上流部にはカルデラ湖である支笏湖と支笏湖を取り囲む雄大な森林地帯がある。森林が途切れる平地部には市街

地が広がり、千歳川の下流域は農地を主体とする広大な平野部である。

野鳥の観察地として、千歳川の上流域にはサケ・マスのふ化場があり、支笏湖周辺では支笏湖野鳥の森や美笛巨木の森があり、恵庭岳や樽前山・風不死岳の森林地帯がある。市街地には青葉公園があり、平野部には旧長都沼^{おさつぬま}があるなど、単一の都市にこれだけの探鳥地があるのは珍しい。

日本を代表する動物カメフラマンである嶋田忠も千歳の自然の豊かさに魅力を感じ、昭和五十五年に千歳に居を移し活動の拠点としている。千歳川周辺やウトナイ湖、北大研究林などで撮影した野鳥の写真集を何冊も著して、昭和六十三年にはシマフクロウを主題とした『カムイの夜』という迫力満点の写真集を上梓している。

千歳市内で確認された野鳥の種類は、『新千歳市史通史編上巻』（千歳市H22）によると、二二四種に及び、本道で確認されている野鳥種四七一種の四五割近くが確認されている。

支笏湖の周辺では一五〇種の野鳥が確認され、クマガラやエゾライチョウ、アカシヨウビン、オオルリなど森林性の鳥類のほか各種の水鳥が記録されている。ふ化場周辺はヤマセミやカワセミ、カワガラスやキセキレイなど清流の鳥たちなど二七種が確認されている。都市部に近い青葉公園では一一一種が確認されていて、シジュウガラやハシブトガラ、ヤマガラなどのカラ類やアカゲラやコゲラなどのキツツキ類が記録され、キビタキやウグイスなど夏鳥の貴重な繁殖地ともなっている。旧長都沼ではガン類やカモ類のほかオオジュリンやコヨシキリなどの草原の鳥、一四六種が確認され、水鳥を狙って飛来するオジロワシなども記録されている。

フクロウ科については、支笏湖やふ化場でエゾフクロウやコノハズク、アオバズク、コミミズク、トラフズク、オオコノハズクの生息が確認されており、国内では稀に迷鳥として見られるシロフクロウを含め七種のフクロウが記録さ

れている。

本稿で取り上げるシマフクロウはこの記録のなかに見当たらないが、これらの記録の基礎資料が昭和四十六年から平成二十年の間に公表された文献と個人記録であることを考えると、シマフクロウの記録がないのも当然で、昭和の中頃から千歳では幻の鳥となってしまった。

鳥類図鑑の記録

我が国には「三大鳥類図鑑」と呼ばれている三冊（組）の著名な鳥類図鑑があり、これらの図鑑のシマフクロウのページを開いてみると、二冊の図鑑にその生息地として支笏湖の湖名を見つけることができた。

そのうちの二冊である山階芳麿の『日本の鳥類と其の生態』（山階書店S9）では「北海道にては支笏湖を圍む大森林や石狩川上流の密林などに棲息して居る。習性に就ては全く知られて居ない。」と記されている。

もう一冊の清棲^{きよせ}幸保の『日本鳥類大図鑑』（講談社S27）では「石狩支庁支笏湖畔1929、1・1937」と二羽のシマフクロウが昭和四（一九二九）年と同十二（一九三七）年の一月に捕獲（採集）された記録が載っている。この図鑑には支笏湖のほか、十勝支庁大樹村、釧路支庁雪裡^{せり}深野・尾幌・白糠町茶路川、渡島支庁函館・清狩、石狩支庁札幌（二羽）、上川支庁剣淵村・大雪山・層雲峡上流と八件の記録があり、道南の函館や道央の札幌にもかつては生息していたことが記されている。

残りの一冊は黒田長禮^{くろだながみち}の『鳥類原色大図説』（修教社書院S9）という図鑑だが、そのシマフクロウの説明文には「南千島及び北海道特産として知らる」とあり、「釧路にては採卵場所附近に棲息す」とサケ類が遡上する河川の産卵場所付近に生息することが記されている。また、この図鑑の新版が昭和五十五年に講談社から刊行されているが、その説明文は「現在は北海道の主に東部と

北部の森林に棲息しているようであるが、棲息数は多くない」という短い記載があるに過ぎない。

さて、清棲の図鑑に記載された支笏湖における二件の記録であるが、そのデータの根拠となったシマフクロウが千葉県我孫子市にある山階鳥類研究所に標本資料（仮剥製）として現在も収蔵保管されているので紹介したい。

図鑑に「1929」と記されたシマフクロウのほうは、標本に付されたラベルでは採集年が「1929年春季」と記され、採集地が「北海道支笏湖」となっているので、「Y10・19491」という標本番号のシマフクロウに相違ない。ただ、標本ラベルには採集者の氏名が空白となっており誰か採集したかはわからない。

また、もう一体の「I・1937」と記されたシマフクロウのほうであるが、採集年は「1937年1月」で標本番号は「Y10・19495」となっており、「福元富太郎から購入、福元は毛皮商より購入」と標本ラベルに記されている。

ただ、採集地が千歳郡恵庭村御料林となっており、清棲の図鑑の支笏湖と異なった地名が記載されているのが気になる点である。

この御料林というのは支笏湖の北東に位置する恵庭市盤尻の近くにあった帝室林野局の漁経営区いさぎと思われる、支笏湖湖畔との距離が直線にして約八キロのところにあり、図鑑とこの標本の採集年が同じ年ということから、まず清棲の図鑑に記載された二体目のシマフクロウに間違いはない。

図鑑の支笏湖という地名とともにその標本が現存していることから、昭和の初め頃の支笏湖周辺の森林には何つがいかのシマフクロウが生息していたと思われる。

山階鳥類研究所には現在国内外の六万点を超す膨大な鳥類標本が収蔵されているが、シマフクロウの標本は僅か一三点しかない。そのうち道内で採集され

たシマフクロウは八点到過ぎず、一番古い標本は明治二十一年に札幌で採集されたものである。残りの五点は国外で採集されたものが四点でもう一点は採集地が不明となっている。

この二三点のシマフクロウの標本のうち三点は中曽根三四郎から入手したもので、中曽根は昭和七年の十二月から翌年の一月にかけて道内（釧路・大樹）や国後島でこれらを採集している。

中曽根は次に紹介する折居彪二郎と並んで当時の我が国を代表する鳥獣標本採集家の一人である。

因みに鳥獣標本採集家という職業は、分類学が動物学の主流だった時代に存在した職業で、射撃やワナなどの方法で鳥獣類を捕獲し、その体躯各部位の計測や色彩の記録を行い、仮剥製にして依頼主である動物学者に送付することを

仕事とし、動物学者はこれらの標本類を基にして自らの研究を深めていった。

中曽根や折居のほか、菊池米太郎や高田昴、寺岡直らが活躍し、彼らの採集した鳥獣標本類が現在も国内外の博物館に収蔵されている。

折居彪二郎の『千歳保護区の鳥獣』

山階芳麿や黒田長禮、清棲幸保らは日本を代表する鳥類学者で、彼らの著した前述の

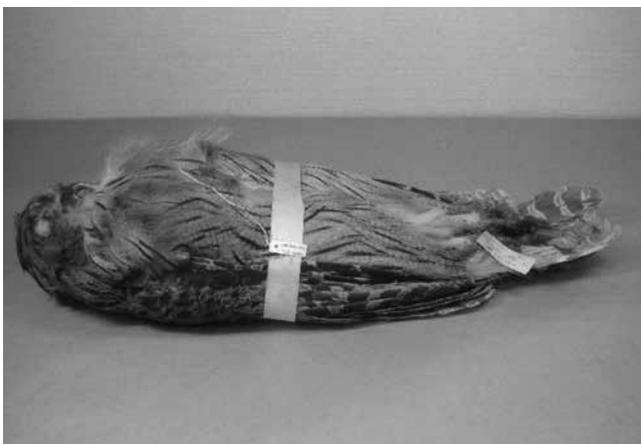


写真3 標本番号 Y10-19491の仮剥製
(山階鳥類研究所所蔵)

「三天鳥類図鑑」は、現在も野鳥愛好家の間では人気が高く、古書店の間では高値で流通している。

山階と黒田は日本の鳥類学を牽引してきた研究者で、我が国の鳥類学の発展に寄与した功績は非常に大きい。この二人と親交があり、彼らの研究に貢献した鳥獣標本採集家が苦小牧に居住していた。

彼の名は折居彪二郎といい、新潟県の出身であったが、大正二年に函館から苦小牧村字植苗五六番地（当時）に居を移し、八七歳で亡くなる昭和四十五年まで、ウトナイ湖近くを流れる美々川のほとりに居住していた。

折居は、三歳のとき、英国人アラン・オーストンに依頼されて朝鮮半島や対馬、杣岐、五島列島に鳥獣類の採集調査に出掛けたのを皮切りに、黒田や山階らの依頼を受けて、大正から昭和の初頭にかけて千島、樺太を含む日本国内や委任統治領であった南洋諸島のほか、中国などに都合三回ほど採集調査に出掛けている。

日本人の研究者で最初に折居に調査を依頼したのは黒田長禮で、大正十一年に琉球諸島の調査を依頼している。黒田は折居が同諸島で採集した一六二二点の鳥類標本をベースにして、我が国では初めてとなる鳥類学の研究で博士号を取得している。



写真4 折居彪二郎(左)と山階芳麿
折居宅前で(昭和16年6月撮
影：苦小牧市美術館所蔵)

また、山階芳麿は折居に七回ほど国外での採集調査を依頼し、私財を投じて設立した山階家鳥類標本館(後の山階鳥類研究所)の充実

を折居らの協力で図る一方、収集した標本を基に鳥類の生息分布に関する生物地理学的研究を進展させ、先の『日本の鳥類と其の生態』という著書に結実させている。

折居の海外での採集調査は昭和十一年に終了し、その後は北海道大学や北海道、林野庁の依頼で道内での調査を行っている。

千歳では昭和三十三年から三年間、干拓で消失する前の長都沼の調査を林野庁の依頼で行った記録があるが、それ以前にも千歳で調査を行った形跡があり、『千歳保護区の鳥獣』という鳥類のリストを残している。市販の便箋四枚に書かれたこのリストにはヤマセミやカワセミなど一二六種の鳥類と二四種の獣類の種名が記載されている。

どのような目的で彼がこのリストを作成したのか、また千歳の保護区とはどこをさすのか、リストには鳥獣類の種名しか記載されていないのでわからないが、エゾフクロウやコノハズク、アオバズクなどとともにシマフクロウの名が載っていて、興味が惹かれるところである。

参考までにこのリストに記載された一二六種の鳥と現在千歳で記録されている二一四種の鳥(『新千歳市史通史編上巻』)を重ねあわせてみたところ、一〇六種の鳥が折居のリストと新市史の両方に記載されていた。地域別でみると支笏湖が九七種と最も多く、順にふ化場八八種、青葉公園八一種、旧長都沼が七五種となっていた。

折居のリストに掲載された一二六種のうち九七種が現在も支笏湖で確認できることとリストにシマフクロウの名のあること、リストの獣類編にヒグマやテンの名があることから、「千歳保護区」とは支笏湖周辺を指すのではないかと思われる。

折居の略伝(『折居彪二郎小伝』郷土の研究5所収苦小牧郷土文化研究会昭和六十二年)をまとめた小山政弘の年表によると、昭和二十三年に折居は北海

道の依頼を受けて鳥類の調査を行い、二十五年一月にこの調査で採集した標本を北海道に納入しており、その後二十七年には鳥獣保護区設定の公聴会に招かれたことなどが記載されている。

この年表ではどの地域の調査を依頼され、どこの鳥獣保護区の公聴会に招かれたのか詳しいことの記述がなく不明だが、これら折居の一連の行動と昭和二十四年五月の支笏洞爺国立公園指定の時期が同じ頃であり、国立公園内の支笏湖鳥獣保護区（北海道指定鳥獣保護区）の設定に折居が関わっていたと思われる。このため、この「千歳保護区の鳥獣」に記載された鳥獣類は昭和二十三年から二十五年に支笏湖周辺で調査された鳥獣類の記録と推測することができる。

同じような『苦小牧附近に見らるゝ鳥雀百廿種ト哺乳類廿三種』という苦小牧の鳥獣類のリストも作成されているが、このリストにもシマフクロウの名があるため、調査時期や調査区域などを詳しく知りたいと思うが、今のところ手掛かりがなく調べようがない。

ウトナイ湖のバードサンクチュアリで長年レンジャーを務めていた大畑孝二によれば、これらのリストは折居が昭和三十五年以前に自分が調査していたものを後日になってまとめたものではないかと推測していて、野鳥識別能力の優れている折居だけにその内容は十分に信頼できるとしている。

丸駒温泉のシマフクロウ

支笏湖で採集された二体のシマフクロウが山階鳥類研究所に仮剥製の標本資料として収蔵保管されていることは先に紹介したが、同じ昭和の初め頃、支笏湖で捕獲されたシマフクロウが苦小牧市内の酒店である名取深沢商店で見つかった。

平成十七年の夏、市内の老舗に対して聞き取り調査を行っていた市民グループから筆者に「シマフクロウらしい鳥の剥製があるので見に来て欲しい」との

連絡があり、カメラ片手に駆けつけたところ、事務所に置かれた剥製は間違はなくシマフクロウで、驚きのあまり暫し声が出なかった。

店主の深沢重男によると、この剥製は支笏湖ポロピナイ丸駒温泉旅館の創始者である佐々木初太郎が、温泉近くの樹に止まっていたのを鉄砲で撃ち落したものだという。父正男は初太郎と親しい間柄で創業時から現在も取引があり、正男が丸駒温泉へ酒類を配達した帰りに「フクロウは縁起が良い」といつて譲り受けたきたそうである。真冬のことでありシマフクロウは凍結したままの姿で、早速市内の業者に依頼して剥製してもらい、その後六〇年以上にわたって自宅に飾っているという。

このシマフクロウが捕獲された時期は不明だが、撃ち落とされた初太郎は昭和二十二年に七三歳で亡くなっているため、それ以前であることに間違いはない。深沢商店の創業時が昭和二年であるため、同年から昭和二十年の間に捕獲されたものであろう。



写真5 深沢宅に保存されているシマフクロウの剥製
(平成17年8月6日撮影：筆者)

ように盛り上がっており、シマフクロウの姿態として違和感を覚え

る。また、シマフクロウが枝に止まる場合は、通常二本ずつの爪を前後に開いて枝を挟むようにして樹に止まるのだが、剥製の爪は三本が前にあり、後ろは一本となっており、一般の鳥類と同じような止まり方をさせている。

初太郎は獵銃をかまえた写真が残っているほどに狩獵好きだったという。このシマフクロウのほかにも別なシマフクロウの剥製があるのではないかと思いい、先日丸駒温泉旅館に赴き四代目となる総支配人の義朗に確認したが、初太郎が遺した剥製は一点もなく、苦小牧で見つかった剥製の写真を興味深く見めていた。

ダム湖の縞鼻

次に紹介するのは、林元一から筆者に寄せられた「千歳での縞鼻」という小文で、林が千歳川のダム湖で体験した話である（ルビニ引用者）。

額平の山で見慣れた大きな鼻が、アイヌ民族がコタンコロカムイと呼び、最高の神として崇める縞鼻シマフクロウと知ったのは、私達が冬山造材を終えて千歳に帰り、本拠地の藤の沢事業所で夏山造材の準備をしている時だった。

ウサクマイの国有林で私達が造材作業をしている間、ランコシの若い作業員の束ね役をしている今泉吉之助さんが、作業の打合わせに事務所に来た。

私は早速額平の現場で見た大鼻の話をし、ウサクマイではあんな野太い声で鳴く鼻は見た事が無いが、千歳にも居るだろうかと尋ねた。

吉之助さんは「それはコタンコロカムイの事でシサムの人は縞鼻と言っている鳥でしょう」と言い、千歳の縞鼻についてはヌナイとウムウセという地名を挙げて次のように語ってくれた。

ヌナイは、現在ユーナイ沢と呼ばれている王子製紙第四発電所の直ぐ上流左岸にある沢で、今は水源までダムの水位が上がっているが、ダムが出来る以前は千歳川の支流で魚が多く、その魚を狙って昼も夜も獣や鼻が鳴き騒ぎ、その声がコタンま



写真6 王子製紙第四発電所のダム湖
奥がユーナイ沢との合流点(平成26年7月撮影：筆者)

で聞こえるのでヌナイ（聞こえる沢）と言っており、何時もコタンコロカムイが居て、下流の村を守ってくれていたところである。
もう一つは紋別川の上流にウムウセと言うところがあって、そこには立派なコタンコロカムイが居て、ウムウセと鳴いているので、その場所をウムウセと呼んでいる。
紋別川が千歳川に合流するところのタブコブ（丸山）はウサクマイコタン（吉之助さんが子供の頃まで過ごした所、現在はダムに沈んだ村）の人達が熊送りをするカムイミンタラ（神々の遊ぶ庭）があり、村を守ってくれる神の鳥が居るので、この川筋では争い事をしてはならないとの言い伝えがあり、それで川の名もモベツ（静かな川）と呼んでおり、ウムウセには今でもコタンコロカムイが居る、と吉之助さんは教えてくれた。

その年の秋も深まった頃、私と関亀二君はダムでハエナワ漁を楽しむため、夜になってから事務所を出、ウサクマイコタン跡の岸辺に繋留していた小舟に乗り、漕ぎ上った。千歳川の川幅一杯に張った細いロープに餌を付けた二十本程の釣りバりを仕掛け、魚の掛かるのを待っていた。

その時、紋別川の上流からポオーツポオーツという野太い鼻の声が聞こえてきた。私達にとつてその声はまぎれもなく額平の山で毎夜聞いた鼻のものだった。一瞬私は額平の鼻が私達を尋ねてきてくれたような錯覚に囚われた。

吉之助さんの言葉通りウムウセ

に梟は居た。その後も私達は年二・三度ハエナワ漁を楽しむため、夜になると二キロ程の山路を歩いてウサクマイコタン跡の船着き場から小舟に乗り、紋別川の合流点でハエナワを仕掛け、魚がかかるまで時々聞こえてくる縞梟の声を楽しんでた。

その後私は、沙流川上流の小さな町にある製材工場の工場長として単身赴任する事になり、山事務所を去ったので、紋別川のほとりに住む縞梟の声を聞くこともなくなった。

昭和四十三年、私が千歳工場長として帰って来た時は、山の仕事も職任分離となり会社の山事務所も閉鎖され、藤の沢部落は無人になっていたが、私達にヌナイやウムウセのコタンコロカムイの話をしてくれた蘭越の吉之助さんは健在で、昭和四〇年頃紋別川筋で営林署が大量の伐採を始めてから縞梟は居なくなりましたが、今でも時々家の川向かいの山で鳴く声や聞こえることがある、と話してくれたので、昭和四〇年代の中頃迄は千歳川筋の森に縞梟が生息していたようだ。

引用が長くなってしまったが、林が昭和三十三年から同三十九年までの数年間、千歳川の王子製紙第四発電所のダム湖で体験した様子を語ったもので、往時を彷彿とさせる内容であったので全文をそのまま掲載した。

シマフクロウのあの野太い啼き声はアイヌの人々には「ウムウム」とか「フムフム」とかと聞こえていたようで、それが地名として千歳川に残っているのも興味深い話である。

また、本来シマフクロウの漢字表記は「縞梟」ではなく、蝦夷ヶ嶋の嶋をとって「嶋梟」と表記するのが正しいのだが、アイヌ文化研究者で詩人でもある更科源蔵も同様に「縞梟」と表記しており、この表記もまた味わい深いものがある。

ふ化場のシマフクロウ

次は千歳川上流域にあるさけ・ますふ化場(現水産総合研究センター千歳さ

けます事業所)での職員の見撃談である。

このふ化場に勤務していた古村秀康と小軽米成人の二人がシマフクロウを目撃したのは平成二年の十月下旬か十一月の初めで、一週間程毎晩ふ化場に飛来していたという。最初にシマフクロウを目撃したのは古村で、最後の見回りをを行う夕方の五時頃、頭の上を大きな鳥が飛んできて第2事業棟の飼育池の縁に止まったその姿を見てシマフクロウと確認した。

翌日、この話を聞いた小軽米はその夜一人でふ化場に残り、前夜と同じように飼育池の縁や構内の木立に止まっているシマフクロウを確認、おそろおそろシマフクロウに近寄っていき、オスの啼き声を真似て反応を伺ったが特に反応はなかったという。

小軽米は標茶町虹別のふ化場に勤務していたころ、よくふ化場にシマフクロウが飛来していたので、まず間違えることはないとのことだった。

この標茶町の虹別地区には現在もシマフクロウがつかいで生息しており、地域住民によるシマフクロウの保護団体「虹別コロカムイの会」が平成六年に結成されている。シマフクロウが生息できるようにと百年の森づくりに取り組み、今までにハルニシやシラカバなど五万六千本以上の植樹を行ったほか、同会が掛けた巣箱からはこれまで三〇羽以上のヒナが巣立っている。

また、古村によればシマフクロウは翌年の平成三年にもやってきたが、それ以降は目撃していないという。ふ化場は夜八時以降は無人になるので、飛来しても確認できる状況にないとのことであった。

ふ化場の飼育池で自然産卵したサケの稚魚を狙って千歳川から上ってくるウグイを捕えるためにやってきたのか(古村談)、或いはサケ親魚の蓄養期間が終了する時期で池の水位が低くなっているところへ親魚の斃死魚や小魚を狙ってやってきたのか(小軽米談)、そのどちらかであるが、目撃した二人ともシマフクロウが魚を食べているところまでは確認出来なかったとの

ことであつた。

アイヌの人々とシマフクロウ

アイヌの人々は自然界にある全てのものに魂が宿っていると考えており、特に人間に多くの恵みをもたらしてくれるものを神（カムイ）として敬っていた。シマフクロウもその例外ではなく、村を守る神（コタンコロカムイ）とか神の鳥（カムイチカプ）と云って尊び崇敬していた。

シマフクロウに限らず、ヒグマやエゾシカ、シャチやサケなどの動物も神であり、彼らは天上の世界（カムイモシリ）から人間の世界（アイヌモシリ）に肉や毛皮などを持参して遣わされたと考えられており、これらの動物たちを捕えて食した後は霊送り（イオマンテ或いはオプニレ）という儀式を行い、再び天上の世界へ送りかえしてやるのである。

ヒグマの霊送りは熊祭りといつて特に有名であるが、シマフクロウの霊送り（フクロウ送り）はこの鳥がヒグマよりも神としての位が高かったためか丁重に行われたらしい。ただ、フクロウ送りに関する古資料は少なく、アイヌ絵では西川北洋が描いた「フクロウ祭り」があるくらいで、映像資料も昭和五十八年十一月に屈斜路湖畔で再現された様子をNHKが番組制作のために撮影したものがあつただけである。

千歳でもこのフクロウ送りは行われていたようで、次のような千歳アイヌの古老による体験談が残されている。

（山川キク）

父がフクロウ（カムイチカプ）を預かって（飼育して）、クマ祭りのようにして送つたことがある。春先に山で生け捕りにしてきたもので、イナウチバ（祭壇）のそばに檻を作つて入れた。檻はセツとかチカプ・セツとかカムイチカプ・セツという。カジカやドジョウなどを食べさせて大きくし、その年の秋に送つた。送るとき

には付近の人々が皆集まり、イナウ削りをした。檻は四本足の四角の柵の上に皮を剥いだ細枝を編んで作つた。イトムンパヤラ（光を受ける窓）から東南方向に見えるところに設置されていた。

主に祖母（フチ）が世話をして預かつていたが、子供が魚を籠に入れて持つていき、手ずからやつてもかまわなかつた。イモを入れたおつゆを木製の小さなたらいのようなもの（キツチ）に入れてたべさせていた。

（白沢ナベ）

コタンコロカムイを送るときは、ロルンパヤラ（神の窓）から出し入れする。別名フツフーカムイ、カムイチカプともいう。私はコタンコロカムイの送りを見たことがある。頭の皮を剥いで、脳みそも舌も出して、目も出して、イナウキケで目も舌も作つてやる。キムンカムイ（ヒグマ）よりも位が高いといわれている。ポロイナウチバ（中央の高い祭壇）の真ん中に立てる。クマの頭がすでに祭られているときには、その右側に立ててある。養つたのでなく、電線にぶつかつて死んだのを私が

拾つてきた。それを父親が送つてくれた。昔は飼つていた幼鳥を送つたらしい。コタンコロカムイはコタンに何か悪いことが起きそうときは教えてくれるので大事にした。

（小田イト）

夫が支笏湖から戻つてくるとき、カムイチカプがいた。いつも見るので、当たらないだろうと思つて、撃つてみるとまぐれに当たつてしまった。夫の父がこれはカムイチカプで偉い神様なのにどうして撃つ

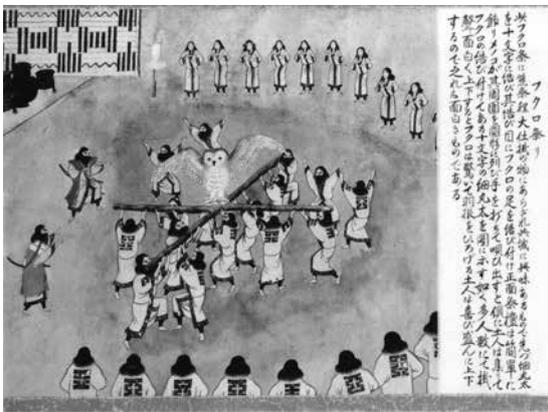


写真7 フクロウ送りの図(アイヌ風俗絵巻)
西川北洋 1800年代末頃(函館市中央図書館所蔵)

た。でたらめに捕るものでないと怒った。夫の父は、皮を剥いで頭にイノウキケを入れて、チェホロカケブ（逆さ割り）を作って、皮や骨をイノウチパ（祭壇）に置いて、肉は食べたという。フクロウにかぎらずでたらめに撃つものでないそうだと。

これらの聞き取りは昭和五十五年から実施された北海道教育委員会のアイヌ民俗文化財調査の報告書からの引用であるが、語っている古老たちの年齢から推測して、大正から昭和の初めにかけての話と思われる。死んでしまったシマフクロウでも丁寧な扱っており、最後はアイヌのしきたりどおりにフクロウ送りをし、シマフクロウを天上の世界に送り返している。

次は、蘭越に住んでいた中本陽三から筆者が直接聞いた体験談である。

少年のころの出来事で、近所に住む友人に父親の猟銃を貸したところ、その友人が千歳川の右岸奥のペサ沢で大きなフクロウを見つけて撃ち落とした。死んだフクロウを家に持ち帰ったところ、それを見た父晴夫は「お前たちは、村を守る神さまを撃ち殺すようなどんでもないことをしでかした」と言って、こっそりとフクロウを送りを行った。当時、さほど裕福ではなかったけれど、精一杯のご馳走をシマフクロウに捧げてフクロウ送りした。子供心に強い自責の念にかられた。

父はまさか自分の息子とその友人が神様であるシマフクロウを撃ち落としたとは他人にいえ、自分たちだけでフクロウ送りをし、その霊を天上に送り返したのもと思った。

生前、父はよく「オコタンペ湖にシマフクロウは棲んでいる」と話していたが、こんなに早くシマフクロウがいなくなるとは思ってもみなかった。

むすび

千歳地方とシマフクロウとの関わりを縷々述べてきたが、思った以上の事柄があり、千歳がシマフクロウとは無縁の土地とは思えなくなった。

かつての千歳川の上流域や支笏湖の周辺にシマフクロウが生息していたこと

はその標本や剥製が残されていることで明らかであり、戦後になってからも生息情報が相当数あり、筆者の予想では昭和三〇年代までは確実に生息していたと思われる。

また、フクロウ送りというアイヌ民族の伝統的な儀式をとおして、かつての千歳のアイヌの人たちとシマフクロウとの結び付きについても古老たちの聞き取りから明らかになっている。

シマフクロウは縄張りや定着性の強い鳥といわれていて、一旦テリトリーを決めてしまえば最後までそこで暮らす習性があり、魚食性の鳥のために河川や湖沼の周辺部の森林に生息することが多い。特に冬期間は食糧が乏しくなるため、湧水池に群がる魚類を捕獲することが多く、湧水が豊富な千歳川のような河川はシマフクロウにとっては恰好の餌場であった。

また、湧水はサケが産卵するためには欠かせぬ条件で、この条件を満たしている千歳川には産卵のために大量のサケが遡上し、産卵場所に近接してウサクマイやユウナイといったアイヌの集落（コタン）があり、その集落の人々は遡上するサケを捕って自分たち生活の糧にしていた。

シマフクロウの餌場であった千歳川はアイヌの人々の漁場であり、飲み水を確保する場でもあったため、シマフクロウの行動圏とアイヌの人々の生活圏が重なりあっていたといえる。

明治の時代になって千歳にも開拓の鉞が入り、千歳川の上流域にもふ化場や王子製紙の発電所が建設されるにしたがってアイヌの集落もなくなり、シマフクロウとアイヌの人々との交流は疎遠となった。その後、この地域のシマフクロウの生息環境も森林伐採などで次第に悪化していき、その姿を見ることは少なくなり、ついには啼き声も聞かれなくなった。

現在のシマフクロウの生息数は微増傾向にあるとはいえず、わずか一四〇羽程度に過ぎず、限られた生息域で細々と命をつないでいるのが実態で、

特に最近は事故死のほか、近親間の交配が目立っており、危機的な状況は脱したというものの未だ不安定な状態にあることは否めない。

現在の環境省や林野庁の考え方は、どちらかというと既存の生息域の保全や拡大が中心であり、シマフクロウがすでに生息していることを前提として進められてきた。しかし、近親間におけるつがいの形成などデリケートな問題が発生しており、既存の生息域にこだわらない思い切った取り組みも必要かと思う。

例えば、若い健康なシマフクロウのつがいを既存の生息域から遠く離れた生息環境の良好な地域に人為的に移動させ、その地域に定着させることも一つの方法ではないかと思う。そうした際の候補地として、千歳川の上流域ほど条件のなかった地域はないのではないか。

周囲の森林は立ち入りの規制が容易な国有林となっており、河川流域の一部は千歳市の自然環境保全地区に指定され、ふ化場周辺はサクラマスが自然産卵出来るような豊かな河川環境にある。また、この周辺にはかつてアイヌのコタがあり、アイヌの人々とシマフクロウとの精神的な結び付きがあった土地柄でもある。その意味でも適地と考えられ、シマフクロウの分散候補地として千歳川の上流域を挙げたいと思う。

現下の状況ではかなりハードルの高い提案と思うが、いつの日かこの地域にシマフクロウが復活することを願って本稿を閉じたい。

千歳周辺でのシマフクロウ情報年表（文献・証言等）

- 昭和4年 清棲幸保著『日本鳥類大図鑑Ⅱ』にシマフクロウ生息分布地域として「石狩支庁支笏湖畔」との記載がある
- 昭和初頭 深沢重男談「丸駒温泉初代経営者佐々木初太郎は温泉近くの樹上に止まっていたシマフクロウを猟銃で撃ち落とし、同温泉に入入りし

ていた父正男（苫小牧で酒店経営）がそのシマフクロウを貰い受け剥製にした

昭和10年代 山階芳麿著『日本の鳥類と其の生態第2巻』にシマフクロウ生育分布地域として「北海道にては支笏湖を圍む大森林や石狩川上流の密林などに生息して居る。習性に就いては全く知られて居ない」との記載がある

昭和12年1月 清棲幸保著『日本鳥類大図鑑Ⅱ』に生息分布地域として「石狩支庁支笏湖畔」との記載がある

昭和20年代初頭 中本陽三談「父の猟銃を持ち出した友人が千歳川支流ベサ沢付近でシマフクロウを撃ち落とし持ち帰ってきた。それを知った父はアイヌのしきたりに倣ってフクロウ送りをした」

昭和23年 北海道教育委員会『エゾシマフクロウ・クマガゲラ特別調査報告書（1977年）』に「ふ化場に夜間舞い降りて養殖されている魚を採食した」との記載がある

昭和20年代 千歳市民談「王子製紙第三発電所と第四発電所の周辺でシマフクロウの姿を見たほか、啼き声も聞いた」（情報提供・先田次雄）

昭和30年代 折居彪二郎著『千歳保護区の鳥獣』にシマフクロウの記載がある

野呂幸次郎談「千歳川王子製紙第五発電所上流に宮果木がありシマフクロウがつがいで生息していた。昭和45年頃に営林署付近一帯を伐採したため、どこかへ行ってしまった。同じ頃紋別川でも見た」（情報提供・床田和隆）

昭和33年頃 林元一談「千歳川王子製紙第四発電所上流左岸のユウナイ沢と千歳川支流紋別川上流ウムウセ付近にシマフクロウが生息していて、千歳川と紋別川の合流付近でハエナワ漁をしていた時によく啼き声を聞いた」

昭和40年頃

中本陽三談「友人とクマ撃ちに出かけた時、漁川の上流の展望台のある右手の山影あたりでシマフクロウの啼き声を聞いた。同じ頃、王子製紙第三発電所人口付近の樹に三羽のシマフクロウが止まっていたのを見た」

昭和50年代初頭

千歳市民談「王子製紙第三発電所と第四発電所の周辺でシマフクロウの姿を見たほか、啼き声を聞いた」(情報提供・先田次雄)

昭和50年10月

北海道保健環境部『野生物分布等実態調査報告書(1990年)』
に「烏柵舞で成鳥がそれぞれ4羽(うち2羽は亜成鳥と思われる)と1羽が確認されている」と記録され、52年10月にも同様の記載がある

昭和54年9

～10月頃

佐々木一雄談「千歳川王子製紙第一発電所構内水銀灯近くの樹にシマフクロウが現われ、午後九時から一時間ばかり逃げる気配もなく悠然としていた」(情報提供・佐田正行)

昭和56年8月

高井美一談「樽前山七合目ヒュッテにシマフクロウ(金色の目をした二尺五寸のオオフクロウ)が天窓から侵入、保護し放鳥した」(証言者〃ヒュッテ管理人〃情報提供・佐田正行) このことは『野生物分布等実態調査報告書(1990年)』にも記載されている

平成2年10月末

or 11月初頭

古村秀康、小軽米成人談「ふ化場の飼育池に一週間ほど飛来していたが、魚を食べているところは見ていない」(情報提供・江連滋弘)

古村秀康談「前年に引き続きシマフクロウが飛来した。その後は現在に至るまで姿を確認していないが、午後6時以降ふ化場は無人になるので飛来していてもわからない」

平成3年12月

19日

JR日高本線勇払駅構内で通勤客が、線路とホームの間にうつつせになっっているシマフクロウを発見した。すでに死亡していたが体温がまだ残っていた

釧路動物園で解剖した結果、右羽と両足を骨折、腹部に内臓にまで達する裂傷を負ったメスの幼鳥であることがわかった

平成5年1月

環境庁は根室市から北大苫小牧演習林に移送した4歳のオスのシマフクロウを95日間ゲージで飼育したのち、定着を目的に林内に放鳥した。放鳥後、所在の確認調査を行うが確認できず、生死は不明である

平成5年5

～11月

小山田栄次郎談「北大苫小牧演習林内の401林班と213林班の間・アツペナイ林道付近でシマフクロウを見た。また、113林班周辺でも見た(放鳥後の個体である可能性がある)」(情報提供・石城謙吉)

平成5年5

～11月

小松裕之談「千歳市泉沢向陽台住宅団地の自宅でする午前1時頃友人と星を見ていた時、千歳川の北西と南西の二方向から啼き声が聞こえた」
千歳市職員談「ママチ川の泉沢向陽台住宅団地付近で何度かシマフクロウの姿を見たが、10月以降は見えていない」(情報提供・先田次雄)

平成6年4月中旬

小松裕之談「千歳川烏柵舞橋方向から啼き声が聞こえた」
山元隆一談「泉沢向陽台住宅団地の自宅付近で鳥の啼き声が気になって調べたところ、シマフクロウに酷似していた」

平成6年7月

ふ化場職員談「シマフクロウの啼き声を聞いた(詳細不詳)」(情報提供・林元一)

平成7年3月

林元一談「千歳川のふ化場から下流右岸上空を飛び去る姿を双眼鏡で確認した」

故林元一氏と故中本陽三氏のご冥福を祈るとともに、ご多用のなか貴重なシマフクロウの生息情報や文献資料の提供を受けた関係諸氏に衷心よりお礼と感謝を申し上げます。